



## はじめに

パールバース先生、大変面白い、素晴らしいご本に賛辞を呈します。早川先生の実に滑かな日本語訳には賛嘆の声を献じます。『サルなりに思い出すことなど』というこれも大変面白い、アフリカのヒヒの話を同時に読んだのですが、この翻訳は少し読みづらいものでした。まあ、原著者の書きぶりから、ちょっと翻訳しづらいところがあったかと、訳者には同情しますが、それにしても早川先生の訳はもともと日本語で書かれたのかと思わせるほどです。

パールバース先生のご本のような考え方が初めて出てきたということは驚くべきことか

も知れませんが、アメリカ人でありながら日本語に通曉し、ロシア語にもポーランド語にもご堪能で、多分そのほかの言語にも通じておられる先生のような方にして初めてお書きになれるご本かとも思います。

**日本語は日本人にだけ通用する特殊な暗号ではない。**

先生が前書きに書かれているように、「日本語という言語は日本人にだけ通用する特殊な暗号のようなものと考えられてきた」ということは「考えられてきた」というところが事実だと思います。それ以上に「日本という国は、日本人以外にはわからない特殊な国」と考える日本人はまだかなり多いのではないのでしょうか。もっとも、このごろはスシパーが各国で流行って、日本人自身も我々だけがナマザカナを食べる特殊な国民とは思わなくなっているようですが。

## どこの国もそれなりに特殊

私は仕事でいろいろな国に行きましたが、一番強烈な印象だったのは、サウジアラビアです。砂漠の国と言いますが、砂漠というよりは土漠です。さらさらした砂ではなくて固い土でほとんど何も生えていません。社宅コンプレックスのようなところにポリエチレンのパイプで水を引いてやっと貧弱な木が育っている。そうした一面の土漠の中でオアシス

だけはナツメヤシが固まって育っているのが遠くからでも、すぐわかります。

そういうほとんど緑のない国に一週間滞在し、帰りの飛行機の最初の寄港地がバンコックでした。もちろん木が亭々と茂っています。緑があるのがこんなに良いことなのかと、或る種異様な感慨に打たれました。その時初めて解ったのです。「緑も深き若葉の里、ナザレの村よ、汝が巷を」という讚美歌の意味を。イエス・キリストはオアシスの人であったのだ。遠藤周作の『私のイエス』を一口でいうと、それまでは怖い怒りの神だった神を、イエスは優しい許しの神として説いたということです。怖い砂漠の神様と優しいオアシスの神様の違い。

行って見なければ解らないのはどこの国でも同じです。どこの国もそれなりに特殊です。そういえばバルバース先生の母国アメリカもずいぶん変わった国です。私は外国語が下手な双璧はアメリカ人と日本人だと半分冗談で言っているのですが、違いは日本人が日本語は日本人にしかわからないと思っているのに対し、アメリカ人は誰でも英語を話すのが当たり前と思っていることです。誰でも、つまり、ほかの国民でも自分たちの言語である英語を話すのが当たり前、と考えるのは特殊ではないでしょうか。

### 話し言葉としての日本語は難しくない

さて、先生のご主張の一つは「話し言葉としての日本語は学ぶに最も平易な言葉の一つである」ということです。私は最も平易な言葉の一つと言えるほど外国語を知りませんが、日本語の話し言葉は決して難しくないということには賛成いたします。例えば我々を悩ます外国語の特徴の一つに冠詞があります。我々に最もなじみの深い英語でも、定冠詞をつけるのか不定冠詞をつけるのか、迷うとこ

ろです。

ところが多くのヨーロッパ系言語では、名詞に女性形男性形（時には中性形）があり、それによって定冠詞が変わります。ドイツ語だと太陽が女性形で月が男性形、フランス語だと太陽は男性形、月は女性形、なんでなんでということになります。日本語には冠詞はありません。

語尾変化も我々を悩ませます。多くの言語では冠詞も名詞も形容詞も動詞も皆語尾変化する、あまり語尾変化のない英語でも動詞は he goes と3人称単数のsをつけなければならない。I am, You are, He is, We are, They are とbe動詞が変化しますが、日本語ではすべて「です」で間に合います。ドイツ語では主格（○○は）所有格（○○の）与格（○○に）目的格（○○を）で定冠詞の形も名詞の形も皆変化しますが、ロシア語では4格でなくて6格もあります。

私のロシア語の先生は、ポーランド人とドイツ人の混血でしたが、友達とロシア語でしゃべるときは、日本語を語尾変化させて使うと言っておられました。市場へ行くという時に「ブ イチブー (into the market)」という風に。もし日本語の名詞が語尾変化すると、「すぐわかりますよ。角を曲がるとイチビ看板があります。」とか「イチボー望する地点」というようになるのでしょうか。

フランス語の動詞変化では過去だけでも複合過去、半過去、大過去、単純過去とあるようですが、日本語では「言った、見た、買った」だけです。日本語では未来形というのは、はっきりは無い様で「明日行く」で話は解ります。日本より時制が簡単なのがインドネシア語だそうで「昨日行く、今日行く、明日行く」で済むらしい。

もう一つしゃべる日本語を簡単にしているのは日本語の語順がそう厳格でないという

ことでしょうか。「僕は君が好きだ」「君が好きだ、僕は」「好きだ、君が、僕は」。先生が書いておられるように「I love you」は語順を入れ替えることはできません。

もう一つ、日本語を簡単にしている原因の一つが「助詞」という便利なものがあることですが、これはかなり外国人を悩ませるのではないのでしょうか。日本への中国人留学生のうちかなりが朝鮮族です。朝鮮語と日本語の文法が非常によく似ているので、中国の朝鮮族の人たちは、学校で第一外国語が日本語だそうです。彼らにとって助詞はそれほど難しくないらしい。しかし漢族の人にとって助詞を完全に間違いなく使うのは、ほとんど絶望的なようです。

漢語（中国語）には英語と同じで前置詞はあっても助詞はないからです。英語国民であるパルバース先生が、日本語の助詞をどうやって克服されたか伺いたいところです。ところが、助詞は日本人にとっても難しい。私は今修士論文の指導をしています。助詞が間違っていたり、違う助詞を使った方が良い文章になる例に沢山会っています。もっともしゃべる日本語では助詞はかなりいい加減に使っても話は通じますが。

### すべての言語は中立である

先生は「すべての言語は、日本語も含めて、実のところ完全に中立的なものです」と書いておられます。『『中立』』という意味は、ある言語が曖昧だとか『表現力に富む』あるいは音楽のように美しい、などと主張することは、主観的な仮定の上のことではない、という意味です」と説明されています。私もあるとき、ほんの少しのあいだ、日本語は論理的な言葉でないという迷信を信じかけたことがありました。しかし、日本語が論理的な言語でなかったら、どうして整然とした法律体系や、

正確な科学論文が作成できるのでしょうか。

また先生は「言語の中には、地理的あるいは歴史的な背景によって特別な意味を持つ事柄に対して独自の語彙が発達してきたものもありますが」と述べておられます。マレー系の言語には「氷」という言葉はないそうです。そもそも氷が存在しないから氷という言葉もない。「固まった水」とか外来語の「アイス」といわなければならないということのようです。これに対しイヌイットでは「日陰の固い青い氷」といった一つ一つの状態に対応するそれぞれの氷という言葉が16種類もあるそうです。だからと言ってイヌイットの言語の方がマレー系の言語より「表現力に富む」とは誰も思わないでしょう。

### どうして言葉は発達したか

先生は、「言語を持つことで人間はより効率的に協力活動を作り出すことができる」と書いておられます。これはその通りだと思いますが、言語を持つから協力関係ができたと考えるのか、協力関係ができてそれをより強化するために言語が発達したのか、どちらでしょうか。関谷は『権力と倫理想』の中で「原始人が協力の意味を見出し、それが協力すべきという倫理観念を生み出した」と書いています。ライオンでも協力して狩りをします。ですから、協力活動をした方がいろいろうまくいくとか効率が良いということを人間が発見して、それが言語を急速に発達させる契機となったと考えることができるのではないのでしょうか。

もう一つ先生が書いておられることは「言葉は『敵』と『味方』を区別する道具になっていった」です。薩摩のことが思い浮かびます。薩摩では薩摩弁以外は禁じられていた。これは、よそ者特に幕府の隠密の発見を容易にするためだったそうです。今でも鹿児島弁

は、純粹な形で残っていれば外部の人間には一番わかりにくい地方弁のひとつと思いますが、よそ者を発見するのに薩摩弁を使うのは極めて有効だったのでしょうか。

ところが「うちの会社」と「よその会社」を区別するために現代のサツマ弁を使うことは今でも行われているのではないのでしょうか。私が若いころ、同じ三菱系のある会社から電話がありました。それは、電話をかけてきた人の上司が私のいた会社を訪問するという予告電話でした。「貴社に当社のトヨタブダイがうかがいます」とその電話の人は言いました。トヨタは人名としても私にはブダイはとっさにはわかりませんでした。私の知っているブダイは魚のブダイです。後でブダイは部長代理のことだと気が付きましたが、私のいた会社ではブダイは使われていませんでした。もしかしたら部長代理という役職は当時なかったかも知れません。いずれにしても、仲間内の隠語を外部に対して使ってはならないという教訓をその時学びましたが、現代でもインゴは「うち」と「そと」を区別するために発達していると言えるのかもしれませんが。

### 「頭と心が『白紙状態』でなければ言語の習得はできない」

先生の書いておられることは沢山あって、それを全部ひとつ、ひとつご紹介すると、結局本一冊分の書評となってしまい、それでは紹介とは言えないとお叱りを受けそうです。私が本当にそうだと思います、でもなかなか難しいと思うのは先生の「頭と心が『白紙状態』でなければ言語の習得はできない」というところです。先生のご本から例をあげれば、次のようなことです。子供が初めて見る動物を指さして尋ねたとします。「ママ、あれなあに」母親はこういう風に答えるでしょう。「あれはブタよ」「ブタ」と子供は繰り返します。今度

はインドネシアからの留学生がトカゲの前で訊きます。「あれは日本語で何と言いますか」「ああ、あれはトカゲって言うんですよ」。留学生は「カダル」というインドネシア語を知っていてそれを日本語に置き換えようとしているのです。

つまり我々は第一言語が頭の中に詰まっただけで、その助けなしに他の言語を習得することは難しく、常に翻訳回路を使って外国語を学ぼうとするが、それでは本当に学ぶことはできないとパルバース先生は言っておられるのだと思います。pig という言葉を聞いたとき、ブタという日本語を思い浮かべるのではなく動物そのものを思い浮かべる、それが言語習得法ということ、或は早道であるということでしょう。日本語ではブタはブーブー鳴きますが英語ではオインクオインクです。極端な言い方をするとブーブー鳴くのがブタであり、オインクオインクと鳴くのがpig ということになります。

もう一つ例をあげます。私がアメリカに住んでいた時の話です。女房が魚屋に行って、「頭としっぽをとって、はらわたもきれいにしてください」と頼むとします。頭としっぽをとってだから「Cut off the head and tail」なのかな、はらわたというのはなんだろうgut かな「Also take the gut out」と言うのかと思うと彼女が言うのは一言「Just clean」 そうすると魚屋はちゃんとはらわたをとって頭としっぽを切り落としてくれます。初めてアメリカへ来た日本人の奥さんは慶松さんの奥さんは英語が上手だと思ってしまう。うちの女房は決して英語がうまいわけではありません。そういう時に何と言えればよいか知っていただけです。

子供がテレビで覚えた難しい言葉を意味が良く解らずに使う時があります。けれども使い方を間違えるということはありません。こ

れはどういう場面でその言葉が使われたのかということはいささかわかってはいるからです。翻訳回路を使わずにその時なんといえればよいかを覚える、これがパルバース先生の言われる「頭と心を『白紙状態』にする」ことだと思います。

しかし、これはなかなか難しい。私のロシア語の先生は、ドイツ語、ポーランド語、ロシア語、フランス語、英語、日本語ができる方でしたが、日本語でしゃべるとき数字だけは母国語でないとぴんと来ないと言っておられました。これは欧米系の言葉では数字が 1,000,000 という風に三桁で区切られ thousand の次は、千の千倍の million になるのに対して、日本語では一万という四桁区切りの数字があり、その次の区切りがまた四桁上の万の一万倍の一億になるからではないでしょうか。

数字でわからないのはフランス語で、70 までは良いとして、80 は  $4 \cdot 20$ 、90 は  $4 \cdot 20 \cdot 10$  といういい方をします。多分フランス人はキャトル・ヴァンと聞いたときに 4 かける 20 とは考えないで 80 という数字を思い浮かべるのではないかとこれを書いていて思いつきました。4 かける 20 足す 10 だから 90 と思うのは翻訳回路思考でキャトル・ヴァン・デイスは 90 というのが『白紙状態』思考ではないでしょうか。

いずれにしても、母国語を使わないで、いきなり他の言語と直面する、これがパルバース先生の外国語習得法だと思います。及ばずながら、私がやっていた方法をお知らせします。アメリカに出張するとき成田で英語のペーパーバックを一冊買います。できるだけ面白く読めるようにミステリーか探偵ものにします。そしてニューヨークまでの 12 時間でこれを読みます。そうすると頭の回転がだんだん英語になってくる。

## 私たちのアイデンティティは「言葉」によって作られる

「人間は、どの言語を話すかによって、特定の集団に『属する』ことになった」と先生は書いておられます。また「自分がどの民族に属するかを決定するのは言語だということです」とも書いておられます。「言葉は『敵』と『味方』を区別する道具になっていった」とすれば、当然味方の言葉を話していれば、それは自分の属する集団の一員ということになるし、そうでなければ、違う集団に属することになるわけです。

それ以上に、我々は自分が使う言葉によって、思考が制限されますから、日本語で話しているということは日本語で考えているということになります。パルバース先生は、母語や母国語より一番適切な言葉として「第一言語」という言葉を使っておられます。パルバース先生は、こんな話を書いておられます。日本で育ったバイリンガルの外国人と話していた時、別の友人が「いったい君は、さっき何語で話していたんだ」と尋ねました。そこで先生は、ひと呼吸おいて「さて、何語だったっけ」と答えられたとのことでした。先生は日本語を完全に自分の言葉のように感じておられ、「日本語で何と言わなければならないか、なんて考えることはない。それは、日本語がすでに私のアイデンティティの一部になっているからです。」と書いておられます。

私が二度目のアメリカ出張でアメリカ人と話していた時「君は今何語で考えていたんだ」と聞かれました。「多分英語と日本語で 50 : 50 かな」と返事をしたのですが、自分でも良く解りません。確かに難しいことを考えるときは、第一言語の方が楽です。ですけれど、英語を聞いて日本語に翻訳し、日本語で考えて英語に翻訳して答えるのでは会話のスピードについていけません。

先生は日本語が、「私の第二本性になっていて、誰にもこのようなことが可能です。誰もが、他の言葉を第二の自分の本性として話す能力を持っているのです」と書いておられます。ここで重要なのは、第二の本性としてというところだと思います。つまり、第一の本性がすでに確立しているから、第二の本性があるということではないのでしょうか。

言葉とアイデンティティについては、私には二つの発見があります。第一はアメリカからの帰国子女の座談会を読んだ時のことです。「日本語だけを話していても英語だけを話していても comfortable でない」という発言がありました。日本語で話をするのに適した話題の時は日本語で話をする、英語で話するのに適した時は英語で話をする、そういう仲間といるときだけが一番落ち着くといったことのように思いました。これは悪く言うと確立したアイデンティティがないということになります。

似たような話を中国籍の朝鮮族の人から聞きました。朝鮮族の話は、前に書きましたが、私は東京経済大学の大学院で、何人かの中国籍の朝鮮族の人たちと知り合いになりました。70歳直前で大学院に入り、75歳で博士号をもらったのですが、その間留学生の修士論文の日本語の面倒を見ました。朝鮮族の人たちは、家では両親と朝鮮語で話しています。しかし学校教育は、中国語で受けます。また第一外国語は日本語で、大学院に日本語の試験を受けて入ってくるぐらいですから、日本語もかなり上手です。もちろん修士論文を書くのは日本人学生でも大変で、日本人の日本語でもかなり怪しいところがありますから、留学生が日本語で論文を書くのは大変なことです。それでも立派な論文を書いて卒業していく人もいます。彼らが、白紙状態で接するのは朝鮮語ですから、これが第一言語になり

ます。中国語は大学まで使用しますから、中国語に困ることはなく、先生流に言えば第二の本性になっているということになります。日本語でも修士論文が書けるぐらいですから、第三の本性になっているともいえるでしょう。バイリンガルどころかトライリンガルで、日本語しか話さない日本人にとってはうらやましい限りです。しかし彼らはどの言語も自分の本当の言語とは感じられないと言います。朝鮮語は親がしゃべっている言葉ですが、おそらく中国へ移住しなければならなかった親の世代は裕福でなく、朝鮮語で高等教育は受けてはいないと推定されます。従って朝鮮語で何でも言えるわけではなく難しい話になると中国語でなければならない。しかし中国語は学校に行く年齢になってから習ったものである。日本語もそれなりに上手であるが、完全ではない。そうすると子供の言葉から大人の言葉まで全部第一言語として修得した言語はないというのが彼らの実感のもとなのではないのでしょうか。

私が英語をちゃんと勉強し始めたのは15歳ぐらいでパルバース先生の外国語勉強よりは早いのですが、アメリカで面白い発見をしました。子供の英語の勉強を見てやるのに、算数の易しい言葉、三角定規とか、分度器とか仮分数とかを英語で知らないのです。むしろ微分積分などの言葉の方が知っている。自分の英語には幼児語・小児語が欠けていると解りました。朝鮮族の人たちも、このようにどこか欠けた部分があると感じるのではないのでしょうか。それがアイデンティティの問題となっていると漠然と感じているのではないのでしょうか。

パルバース先生は20歳まで、(他言語を話さず)英語でアイデンティティを確立されていますから、いくら他の言語がうまくなってもこうした問題はないと思いますが、こう

した問題が起きるのもアイデンティティは「言葉」によって作られるからなのでしょう。小学校からの英語教育がうまくいくとは思っていませんが、もし仮にきわめてうまくいったとしたらアイデンティティの問題が出てくることを推進論者は考えているのでしょうか。

ここまでで先生の、「第1章 言葉とは何か」、「第2章 日本語は曖昧でも難しい言語でもない」の紹介を終わります。もっといろいろなことを書いておられますが、私が消化した分というか、私の経験から書ける紹介ということでその後は割愛させていただきます。

### 日本語一驚くべき柔軟性を持った世界にもまれな言語

先生のご指摘を一言で言うと「日本語は膠着性言語であるので、(たとえば)英語のように多くの語彙を必要としない」ということだと思います。膠着性という表現を私は初めて知りましたが、これは agglutinative を日本語訳した言葉だそうです。glue は膠の意味がありますから、膠でくっつけることのできる言葉ということでしょう。

具体的には、「ある言葉の前、真ん中、後ろに新たな別のかなを『くっつける』ことで、その言葉の意味を実に簡単に変えることができる言語である」と説明されています。「英語などには見られない、日本語の驚くべき柔軟性の本質があります」ということになるようです。前にななをくっつける例に「まっ先」や「くつつく」があり、中に入れる例では「見る」や「とめる／とまる」に加えてできる「見(ら)れる」や「とめられる」、後ろにつける例に「起こる」にくっつけて「起こりうる」「白い」からの「白っぽい」があげられています。

さらに、「言う」という動詞に「くっつけ

る」という作用を応用してみると「言われる」や「言わない」だけでなく「言いふらす」「言い放つ」「言い返す」「言いかける」「言い回す」「言い残す」「言い抜ける」「言い落す」「言い捨てる」「言いつける」「言い渡す」そして「言い寄る」など、意味の異なるおびただしい数の言葉が生まれるということです。このうち「言い回す」は「言い回し」の方がよく使われていると思いますが、ちゃんと広辞苑に載っている言葉です。

英語では日本語と同じように意味を変化させるためには、全く異なる言葉を一つひとつ使う必要がある、とのこと。仮に言葉を足す場合でも、厳しい語順の制限の中でやらなければならない、とされています。日本語の本質については「日本語の語彙を形作っている構造は、たとえば英語の場合とは全く違っている」と説明されています。こう指摘されると、きわめて納得性がありますが、私たちが通常こういう意識をもって日本語に接していることはなく、先生のご指摘に驚かされたということではないでしょうか。また、作り出された「言い出す」「言い回す」「言い残す」という新しい表現の意味を推測することは、非日本人にとってもさほど難しくないというご指摘も興味あるところです。

英語の場合は、沢山の語彙をもっていないとこれらの日本語に対応する表現を見つけることは非常に難しいとのこと。「日本語では、語彙を覚えることより、むしろ日本語の本質である言葉自体の柔軟性を理解し、応用することの方がはるかに重要なのです」と先生は述べておられます。「日本語の名詞は『てにをは』を使うだけでどんな格にもなれる」。前に日本語の助詞の話は書きました。格というのは、私は(主格)私の(所有格)私に(与格)私を(目的格)という意味です。格変化の少ない英語でも、I, my, me と変化します。

英語では与格 me と目的格 me が同じですが、ドイツ語では mir, mich と区別されます。

日本語では「私はカモメ」「私の本」「それを私にください」「私の選んだ人を見てください」で済みます。以下引用です。「膠着性言語である日本語は、単語を自由に入れ替えることのできるとても柔軟な言語であると言いましたが、それは『てにをは』とい四つの文字のおかげでもあります。このたった四語を使うだけで、ある単語が主語になったり目的語になったりと、文章の中での役割(格)を簡単に変えることができるからです」。

また「おそろしく広大で美しい日本語のオノマトペの世界」という表題が本にあります。オノマトペというと通常は擬声語というか、何かの音をまねた言葉、雨がシトシト降るとか、水がジャージャー漏るとかに使われるものだと思いますが、先生は「擬態語、擬音語、擬情語が日本語の表現を豊かにしているだけでなく、日本語の柔軟性をさらに高めている、これらを総称したものが『オノマトペ』という言葉です」と述べておられます。

その一例の擬態語として啄木の「はたらけど はたらけど」の短歌の「ぢっと(じっと)」が挙げられています。現実の音をまねる擬声語(「ざわざわ」「がやがや」など)、音でない状態を表す擬態語(「にやにや」「うろうろ」)人の感覚やある状態を表す擬情語(「びくびく」「ひやひや」)などを含めて日本語のオノマトペは論じられてきたが、「日本語の擬態語が表現できる領域は実に広く、複雑かつ美しいものです」と言っておられます。

日本語を学ぶ外人にとって擬態語は数少ない難所の一つだそうです。どうも我々はそうした意識なしにオノマトペを読んだり使ったりしているようです。

日本語の擬態語の特徴は、しばしば同じ音を二回連続で反復すると言われてみると、確

かにそうです。女房に「とぼとぼ歩くな」と怒られるし、気を付けないと「よろよろ」します。若い娘さんには「すいすい」抜かれてしまいます。せめて「よちよち」歩きの幼児には負けたくありません。擬態語には膠着性言語の利点を生かして他の言葉と使うことも可能で「バラバラ殺人事件」は強烈ではっきりしたイメージを喚起するし、「ごきぶりホイホイ」はユーモアあふれる語感と不思議で強烈なイメージを作り出した商品名の傑作と紹介されています。

さらに驚くことは擬態語に動詞の語尾をつけると動詞になるとしてざわめくの例が挙がっています。宮沢賢治は擬態語を作品にちりばめているとパルバース先生は言っておられます。例えば「うらうらと湧き上がる味爽の喜び(まいそう: 明け方の意)」です。「日本の擬態語は、まるで手の中のパイ生地のようにいくらでも変形がきくものと言えます。日本語とその擬態表現を使えるようになれば、日本人に限らず、誰でもこの豊かな柔軟性と自由な表現手段を手に入れることができるでしょう」と記されていました。

「擬態語と動詞の組み合わせが創り出す幅広い表現」という表題もありました。「こっそり」という擬態語を使うと「こっそり出る」「こっそり跡をつける」「こっそり逢う」などの表現が可能ですが、英語で言おうとすれば一つひとつの表現に別々の単語を見つけなければならないそうです。「彼は昨夜こっそり立ち去ったよ」は He stole away last night. となるようです。Stole は steal の過去形で「何かしらこっそりやる」たとえば「盗む」から「盗塁」するは steal a base となります。動詞と連結させて縦横無尽に表現を紡ぎだせる擬態語という道具があれば、もともとの語彙がそんなになくても、さまざまな行動や感情を表現することができる、だから日本語の語



彙はそんなに多くない、先生が知る限りの他の言語においては、こういった多様な表現のためには、実に多くの言葉を要します、と語っておられます。

ここからちょっと飛んで「形容詞の使い方に見る、日本語の驚くべき簡潔さ」に入ります。例として「えらい」「若い」「惜しい」が挙がっています。「えらい」一語だけでいろいろな意味を表現できるだけでなく、例えば「えらそう」という表現もできます。「なにをえらそうに」という簡潔な表現は英語では Who does he think he is. (自分を何様だと思っているんだ)と複雑になります。「若い」もいろいろな使い方ができるとされています。年齢が若いだけでなく、ワインが若い、会社が若いなど。「おいくつになられたんですか」「69です」「えっ 69? 若い」この若いは実年齢より若く見えるという意味で、言語学的に見ると、形容詞を実に簡潔に使っている例とされています。もっとも、私が「えっ若い」と言った時には私より一回り以上も若いという意味かも知れませんが。

「惜しい」の使い方不思議とされています。「惜しい人を亡くした」の「惜しい」は普通の形容詞の「若い人」といったその人そのものを形容する言葉ではなく、「その人の死が、残念なものである」という状況に変わってしまっている、言語学的にとっても興味深いとされています。確かに状況がなく単に「惜しい人」と言われたら何の意味か分からないでしょう。

「日本語は『入れ替え』『切り取り』が自由なので『省力』が簡単に行える」これが先生の次の表題です。宮沢賢治は「炭酸カルシウム」から「炭カル」という造語を作り出したとされています。「炭カル」とか「塩カル」「硫バリ」といった略語が普通の化学業界にいた私には、宮沢賢治が「炭カル」を作り出

したと言われるとやや違和感があり、もっと前から使われていたのではないか言う気がしますが、それは別として「日本語という言語そのものが、単語やその音を分解したりくっつけたりして省略語を作るのが容易な、非常に合理的な膠着性言語」と説明されています。

確かに我々は日常的に省略語を使っており、さらに新しい省略語を日々生み出しています。先生ご指摘の「何かを暗示する」ことが日本語の重要な要素であり、「説明的」という日本語に否定的な響きが感じられるということは、そうであり、これは何かを省略するということにもつながっていると考えられます。ただ私が指導している税法論文では、ちゃんと説明してくれないと論文にならないので、暗示するから読み取ってくれは困るのですが。

近頃はやりの「アラフォー」のように外国語どうしをでも便利な省略語を作り出せるのも日本語の特色とされています。「アラカン」は私より上の年代には嵐寛寿郎ですが「アラウンド還暦」という外来語と日本語を結合させた省略語だそうです。「エアコン」は和製英語ですが、今や世界中で使われる大変便利な省略語になっているそうです。「日本語が持つ省略の機能は、言語学的に見て不思議かつ興味深い驚きなのです」と記されています。

先生は『『見れる』などのら抜き言葉も一種の省略形だと思います』とされています。「れる、られる」の使い方を厳しく叩き込まれた私たちの年代にとっては違和感がありますが、「見れる」は可能「見られる」は敬語または受け身という使い方が定着する可能性はあると思います。

日本語が話されている国の外では修得するのがきわめて困難なのが敬語とされています。それは日本の風土に基づいた独特の表現だからということのようです。私はきれいな

敬語というものは大変美しいと思い、後でお話する台湾のご婦人のきれいな日本語も敬語の使い方が実に見事だったのですが、パルバース先生は「若者が敬語を間違っ使用したり、敬語をないがしろにしている風には感じません」と言っておられます。確かに敬語とは状況に応じて使われる言葉です。社会環境が変わったり、対人関係が変われば敬語の使用法は変わるでしょう。先生は「日本語の柔軟性のおかげで、彼ら若者には言語を自分たちに適した形で使う自由があります」と言っておられます。

ただ私は言葉の整合性という意味での敬語の乱れが気になります。「天皇陛下が〇〇へ行った」という言い方は違和感があります。陛下というのは敬語ですから、それなら「行かれた」とか「いらっしゃった」とか言って欲しいのです。同様「雅子様」というなら「いらっしゃった」です。「雅子さん」なら「行った」でも良いでしょう。それとも若者の感覚では雅子様と様を付けたのだから十分敬意を払っているということなのでしょうか。

パルバース先生は「さん」についてもいろいろ書いておられます。これについては大部分省略しますが、ひとつ「大丸さん」という人でないものへの使用をあげられています。「さん」を多用するのは関西の方が多く、戦時中「お豆さんの配給でんにゃわ」と言ってえんどう豆が配られてきたことがありました。

先生は「敬語は日本語と日本人の国民性に深く結びついている」に次いで「日本語は柔軟性のゆえに、語彙が少なくても限りなく多くのニュアンスを簡単に表現できる、不思議かつ驚くべき言葉である、それゆえに日本語は世界語になる可能性がある」と述べておられます。

このご本を要約すれば、上記に尽きると思

いますが、それをわかっていただくためには、やはりこのご本を全部読んでいただく必要があるでしょう。

## 世界に誇る美しい響きの日本語とは

先生は「すべての言語の響きはひとしく美しいと思います」と書かれています。1950年代にアメリカの戦争映画を見て育ったパルバース先生はドイツ兵の喚き散らすドイツ語を聞いてドイツ語に嫌悪感を持たれたそうです。しかし1960年代ドイツに旅行して詩や音楽に触れ、ドイツ語が非常に美しい響きの言語と思知らされたとのことでした。

日本人は、シューベルトやシューマンの歌曲を通じて初めからドイツ語のうつくしい響きに触れた人が多いのではないのでしょうか。例えばシューマンの「麗しの5月に」は音楽の美しさだけでなく、詩の美しさが我々を魅了します。私のロシア語の先生はドイツ語の先生でもありました。『Im wunderschönen Monat Mai』のヴェーデル シューネンのところは普通に歌ったのではだめだ、本当に素晴らしく、素晴らしく美しくと強調しなければ」と言っておられましたが、ニューヨークへ赴任してその意味が初めて解りました。着任したのは3月です。女房子供は4月初めに来たのですが、東京は桜が咲いてうらうらしたところからニューヨークへ来てみると、まだ寒くて木は枯れ枝ばかり、いつになれば暖くなるだろうと心細かったと思いますが、それが5月1日になるとレンギョウも桃も桜も、クラブアップルもダググウッドも一斉に花開いて突如春が来ました。これがシューマンの麗しの5月だったのだ。

パルバース先生はロシア語のXの音に言及されています。これは日本語にも英語にもない音で喉の奥でカッとカハッと発音され、日本語ではハ行英語ではKhで表記されるもの

です。先生流に言う、「ざらざらした」音ですが、ロシア人には言葉の使われ方によって、とても美しく響くということです。意味の解らない外国語の音を、自分の第一言語を基準に判断すると、その言語の音の響きに誤った印象を持つかもしれないと述べられています。

ロシア語の X の音が日本語に無いように、ロシア語にはハヒフヘホの音がありません。だからハセガワさんはガセガヴァさんになります。ヒットラーはギットレルです。人間はある年齢以上になると、自分の第一言語の音を当てはめて外国語を発音しようとします。L と R の区別のない日本語からでは rice も lice も一緒になってしまいましたが、アイウエオの発音ができない英米人にとってはヨコハマと発音するのは難しい。ヨーコーハーマアになってしまいます。アイウエオが発音できないというのはアー、イー、ウー、エイ、オウになってしまうという意味です。

余計な話をします。関西弁英語はどうして通用するのか。日本語は母音の多い言葉だと言われます。しかし日本語はというより東京弁あるいは標準語では母音の発音は決して強くありません。これが日本人の外国語発音をわかりにくくしている理由の一つです。ドイツに出張したとき駐在員がアトランティック・ホテルと言ったのですがこれがタクシー運転手に通じない。私がアートランティック・ホテルというように言ってごらんというとうすぐ通じました。関西弁特に大阪弁は日本語には珍しく母音を強調する言語だと思います。カがチをスタではなくカアがチイ・スウタというように。だから外国語の母音発音に関しては関西弁の方が通用しやすい。但しなんでも母音をつけると and が安藤さんになってしまいますが。

余計なところへ遠回りをしましたが、パルバース先生は日本語の音の美しさに言及して

おられます。先生の知識は日本人である私の上に行くもので、私の知らない引用が沢山ありますが、例えば与謝野晶子の「きけな神恋はすみれの紫に ゆふべの春の賛嘆のこゑ」という歌を私は知りませんでした。「おお、胸が震えるほど美しい、愛への讚美歌のようです」と先生は書いておられます。「しかし、本当の美しさは日本語の音色にあります」以降はそのま引用させていただきます。「冒頭の『きけな』と次の『恋』にみられる『k』の響きの繰り返し、さらに『紫』の『き』と最後の『こゑ』の『こ』と再び『k』の響きが続きます。しかし、この短歌の美しさは（中略）音の響きが美を生み出す metaphor（暗喩）をもたらししているのです」。

音の響きというと「恋」は「濃い」に通じます。菫色の夕暮れは、淡い菫色ではなくて濃い紫色で、どこも紫いろの影に満ちているのでしょう。春の夕暮れは、青春の暮れ方かもしれない。それにしても先生が k 音の連なりに注目されたのは感服です。「清水へ祇園をよぎる桜月夜今宵会う人皆美しき」は見事なき音とぎ音の連なりではありませんか。

先生の一番お好きな日本の作家は宮沢賢治のようです。もちろんいろいろな作家に言及しておられますが。私が宮沢賢治を最初に読んだのは多分小学校の3・4年生くらいの頃「注文の多い料理店」です。いとこ会というのがあって親類があつまった際、父親と二人で「注文の多い料理店」を朗読したのです。「貝の火」「オッペルと象」「北守将軍と三人の医者」「ポランの広場」「グスコーブドリの伝記」皆懐かしい思い出です。「セロ弾きのゴーシュ」なんという詩情でしょう。インドの虎狩りってどんな曲だろう。最後にゴーシュがカッコウに向かって言う独り言が印象的です。「風の又三郎」笹長根の降り口という地名が気に入っていました。「やまなし」谷川の底

を映した2枚の幻灯です。クラムポンはクブクブ笑ったよ。そこへいい香りのやまなしの実が流れてくる。原体剣舞連、イギリス海岸の歌などの詩も好きでした。小岩井農場へ行ったときは笹森、狼森、盗人森があって感激しました。そういえば京都の仁和寺の近くに山猫軒という店がありましたっけ。

先生は萩原朔太郎の詩を引いて、「なんと美しい音色でしょう（そう日本語には、音にも色があるのです）」と言っておられます。また「漢字、カタカナ、ひらがな、ローマ字の視覚的側面が、私たちの音の響きへの反応に影響を与えます、このようなことは英語のようなアルファベットだけの言語には存在しません」と述べられています。

「美の作曲家、賢治は誰よりも擬声語、擬態語、擬情語に精通し、言葉の音を自由に操る見事な技で、私たちに宝箱にたどり着く道を指し示しているのです」。そういえば賢治は実際に作曲しています。「飢餓陣営」（私の記憶では「飢餓陣営の夜」なのですが）の中で歌を書いています。息子がカブスカウトで習ってきた「赤い目をしたサソリ」で始まる「空の巡りの目当て」も賢治の作曲でした。高倉健の遺作「あなたへ」で田中裕子が歌っています。

「賢治のすぐれて創造的な日本語の最もすばらしい点はどこにあるのでしょうか」と先生は自問自答されています。宮沢賢治は日本語を「日本」という国の枠を超えたところまで昇華させた。「もちろん彼は日本語を使っていますが、その日本語は、もはや日本と日本人のアイデンティティの枠を超えてしまっているのです。賢治にとっての言語とは、人間がいつでもどこにいても自然と語り合うことができる媒介です。（中略）彼にとって言語は民族の暗号などではなく、自然をそのまま再創造するための媒介だったのです」。

私が賢治をたくさん読んだのは子供の時でしたから、賢治がローカルな詩人かコスモポリタンかなどと考えたことはありませんでした。ただやや不思議だったのは、オッペルにしてもゴーシュにしても日本の名前でないのです。どこのお話しかわからない事でした。オッペルは稲こきをしているところは日本ですが、象が出てくるからインドなのかタイ国なのか。それよりうらやましかったことはオッペルがぞうきんほどあるオムレツを食べているところでした。今でもオムレツが好きな私はオムレツが出ると女房とぞうきんほどの冗談を交わします。

ゴーシュの金星交響楽団は街にあるだけでどこの街かはわからない。ブドリも岩手県を思わせるイワトーヴォーの出身ですが、最後に赴くのはクラカトア火山島です。クラカトア火山はインドネシアにあります。ブドリの話では火山を爆発させると空気中に炭酸ガスが増えて気温が上がり、冷害が防げるので人工的に火山を爆発させることになっています。クラカトア火山の存在を知っていたり、地球温暖化の先駆けのような話をとりいれたり、賢治は日本の外の知識もいろいろ持っていたようです。いずれにしても賢治の童話はどこの国であってもよいし、どこの言葉に訳されても楽しく読まれるでしょう。

### 「世界語」（リング・フランカ）としての日本語

先生は、「日本語はリング・フランカの可能性を持っている言語」と書いておられます。

つまり日本語は世界共通語となる可能性があるとっておられるのです。リング・フランカになるかどうかは別として、先生が書いておられるように確かに日本語が今より広く使われていた時代があったことは事実です。日本の統治時代に朝鮮半島では日本語使用を

強制しました。台湾では強制ではなかったようですが、台湾人の家庭でも、日本語が上手で、日本語の学校へ行きたい人は、行けたようですし、現地語の学校でも、日本語が教えられていました。だから、今でも年配の人は日本語が話せます。台湾でも韓国でも仕事をしましたが、韓国では会長とは日本語で、息子の社長とは英語で話しました。台湾でも共同出資の相手側の董事長とは専ら日本語で交渉しました。

部下の結婚式に出席したある時、たまたま台湾人のご婦人と同じテーブルになりました。この方の日本語は素晴らしくきれいで、今どきの日本人の奥さんが使う日本語より、はるかにきれいでした。あまりに不思議なので、「どうしてあなたの日本語はそんなにきれいなのですか」と聞いたところ、「私の家は私が小学校4年まで（日本の敗戦まで）国語家庭でした」という返事でした。国語家庭というのは家でも日本語だけ使うということだそうです。

「今はどうですか」と聞いてみました。すると、「上の子供たちはインターナショナル・スクールに行っているので、英語で、下の子どもたちは中国語の学校に行っているので北京官語で、召使いとは台湾語で話します」という返事でした。ますます不思議になって、「ご主人とは何語で話すのですか」と聞いたところ、ちょっと考えてから、「やはり日本語が一番ぴったり来ます」という返事でした。この方のご主人はドイツの会社に勤められていてドイツ語もできます。アイデンティティはどうなるのでしょうか。

もう一つ朝鮮半島で日本語が使われていた話を書きます。日米戦の時、アメリカでは日本語の上手な諜報将校を教育することが行われていました。一日中日本語のラジオ放送を聞かされ、一日に覚える単語数が強制され、

それができないと脱落になるといった猛烈な訓練が行われた結果、卒業できるのはたとえ千人に一人でも、全く日本語に不自由しない将校が誕生したようです。そうした人たちの間には友情というか連帯感が生まれ、日本占領のあいだに、彼等どうしの間で手紙のやり取りがありました。手紙はのちにまとめて出版されました。『From a ruined empire, Letters - Japan, China, Korea 1945-46』というオーティス・ケリーが編集した本には دونالد・キーンも登場します。

この本の中に米軍が朝鮮半島に駐留した時の話があります。終戦直後ですから朝鮮半島の人ほとんどみな日本語が話せた。ですから、日本語を話す諜報将校とは日本語なら話が通じた。ところが日本語は、朝鮮半島の人にとっては不愉快な統治者の言葉です。また米軍にとっては敵国の言葉です。そういう指摘があり、それでは英語で話そうかといったところ、いやいやぜひ日本語で話してくれと言われ、共通語は昨日までの敵国語だったという話が載っています。

Lingua franca を辞書で引いてみると、もと主に地中海沿岸で通商などの用いられていたイタリア語、フランス語、スペイン語、アラビア語などの混成語とあり、また pidgin English のような（混成）通商語という意味もあり、最後の意味が共通語となっています。

私が最初の外国出張をしたとき、ミラノ空港が霧で、飛行機が飛ばないためミラノからスイスへ汽車で行くことになりました。同じコンパートメントに、イタリア人、スペイン人、ブラジル人が乗っていました。彼等どうしは、それぞれ自分の言葉で話をしていてお互いにわかっているようでした。それをイタリア人が私に英語で通訳してくれました。イタリア語、スペイン語、ポルトガル語はそれぞれの言葉で話してもお互いに解り合える、

ラテン語ベースの言葉は便利なものだと実感しました。もっとも同じラテン系の言葉でもフランス語ではこうはいかないと思いますが、これができるのは、多少発音に違いがあっても共通の語彙が非常に多いためだと思います。

そうするとリング・フランカになるための日本語の不利な点は共通ベースとなる単語がきわめて少ないことにあると思います。共通ベースとしては漢字があるのですが、これがますます乖離する方向にあるようです。漢字は覚えるのが大変ですから、略字を使う、或は略字が正式の字体となるのは致し方ないことです。

一番古い漢字が残っているのは台湾です。お店の看板を見ても、発音は解らなくても何のお店か大体の見当はつきます。韓国では看板はほとんどハングルですから、韓国語を知らなければ何のお店かわかりません。韓国の人に聞いたところでは、ある時期、石頭の軍人の文部大臣がいて漢字の使用を禁じたので、漢字を知らない年代の人がいるとかです。ただ面白いのは、日本語時代からの古い単語が残っていて重役室という表示を見かけました。

同じ漢字圏なのに一番漢字が読めないのが中国で、どんどん略字や新漢字ができていくからです。交通標識を見ても、例えば橋の略字が違いますから良く解らない、bridge と英語の表示もあるのでやっと橋だとわかるといった具合です。私は漢字圏では少なくとも字を見ただけである程度分かり合えることが望ましいと思っています。確かに中国語の新聞を見た場合、我々日本人が何の話か推定できる確率があるのに対し、漢字を知らない欧米人が見た場合は、何もわからないでしょう。中国、日本、台湾、韓国、北朝鮮などが漢字共通会議を開いて、略字が共通になるようにするのが望ましいと考えたのですが、今の政

治情勢では全く無理と思います。

そうなると、むしろ非漢字圏の人を含めた、リング・フランカとしての日本語ということになりますが、その際漢字の便利さがどうなるかの問題が起きます。交通標識はその最たるものでしょう。新宿は Shinjuku よりはるかに識別しやすい。橋は一字ですが bridge はアルファベットでは6文字です。一方漢字は覚えてしまえばとても便利なものですが、日本人ですら、不便の無い生活に必要な漢字数、2万字か3万字か知りませんが、記憶するにはかなりの年数が要ります。

日本語がリング・フランカになるためには、パルバース先生がお書きになっているように、「よりあり得ることとしてカナとローマ字併用すること」に可能性があるように思います。戦後すぐのころ、事務の効率化を目指してカタカナやローマ字を文書に採用する会社があったように記憶しています。その頃は、パソコンやワープロがありません。日本語のタイプライターは大変不便なもので、専門のタイプピストでなければ使用できず、また打つのに時間がかかり、公式文書でなければ、タイプしてもらえませんでした。その点ローマ字なら英文タイプが使えるし、カナタイプでも48字で済みます。

しかし、ローマ字化やカナ文字化はすぐ廃れてしまいました。トウキョウトシンジユククノクヤクショノコウエンリョクチカはどこで区切ってよいかわからず、また公園緑地課か公園緑地化のいずれであるかわからないといったことから、うまくいかなかったものと思われます。一方、漢字の無い欧米系の言語では、アルファベットだけで読み書きが不自由なく行われています。もちろん同音異義語を区別するためには、スペリングを変えなければならず、これは漢字同様覚えなければなりません、(たとえば Wednesday はどうし

て Wednesday ではないのでしょうか) それでも、漢字なしで成立しています。確かに、橋は一字で識別可能です。しかし英語国民は bridge を一つずつブ・リ・ッ・ジと読んで橋として識別するのではなく、bridge は一塊のものとして識別しています。

この辺に、カナ・ローマ字混合系の可能性があるように思います。例えば名詞はローマ字でそのほかの言葉はカナで書くといったやり方です。「Watakusi は kinou, kouen de yakyuu をみていました」といった具合です。「Watakusi ha kinou kouende yakyuuwo miteimasita」よりは、わかりやすいのではないのでしょうか。もし watakusi, kinou といった言葉が一塊のものとして認識されるようになれば、もっと読みやすくなると思います。ただ緑地課と緑地化をどう区別するかという問題は残ります。英語式に考えると rykutika と ryokutikwa で区別するといったことが考えられます。この方式がうまくいけば、ローマ字・漢字変換にも使えそうです。

ただ英語が、これだけ共通語として通用しているのは、かつては大英帝国の、今はアメリカの経済力、政治力、軍事力が強大だということによります。別の観点から言うと、個人個人にとって、その言語を学ぶことが自分にとってどれだけ利益になるかによって、その言語の広まり方が決まるとも言えそうです。日本語で立派な論文を書いても、残念ながら日本語を読める学者は多くありませんから、日本人も英語で論文を書くことを余儀なくされるといったことになります。この辺が日本語の世界語化では問題です。

もちろんパルバース先生が書いておられるように、征服者が征服した国や地域の人を服従させる最大の武器が、征服者側の言葉だったということでしょう。征服者側の言葉がすっかり残るのか、それとも征服者がいなく

なったら現地語に戻るのかは客観的に見れば興味ある問題です。

南米大陸はすっかり、スペイン語とポルトガル語になってしまいました。インドネシアはオランダ語化しませんでした。インド、パキスタンは完全に英語化したわけではないが、今でも英語がかなり通用しています。特にインド人やパキスタン人の英語作文力は大変優れているようで、大変難しい作文を苦も無くこなせるようです。ジョイント・ベンチャーの相手方だったインドネシアの会社は、インド人を英語係として雇い、難しい契約書の作成やそのための交渉は一切インドの人に任せていました。

パルバース先生が書いておられるように、次の時代で英語に次いで多く使われるようになるのは中国語でしょう。中国の経済力軍事力等を考えるとそうなることは避けられないと思います。

もう一つリング・フランカを考えると昔にない要素があります。それはインターネットの普及です。インターネットによる大学の放送講座が教育や大学の将来像を変えるかもしれないという話は前に書きました<sup>注1)</sup>。文科省が小学校の英語教育を本気で取り上げるなら、どうして英語放送に真剣に取り組まないのでしょうか。英語が得意でない小学校の先生に英語の授業をやらせるより、英語のアニメを毎日観させた方が、ずっと白紙接触になると思うのですが。放送はテレビでも良いしインターネットでも良いと思います。インターネットを使えばもっといろいろな可能性が生じることでしょう。

どのくらいやられているか知りませんが、日本語のリング・フランカを考えるなら日本語のまま外国でアニメの放送をしたらどうでしょう。

日本語がリング・フランカになるとはなか

なか思えませんが、もしなるとしたら、その国の言葉を置き換えてしまうのではなく、今の英語のように第一外国語として誰でもそこそ共通にコミュニケーションの手段として用いることになるのだと思います。そうなったとき、日本語化した日本語でなく、その国に合わせた日本語が使われるようになるのではないのでしょうか。英語がアメリカ英語になったり、カナダ英語になったり、フランス語がケベックフランス語になったり、さらに英語が Singlish になったり、のように。

Japanglish, Chapanese や Japarian,

Germanese, Japoncais などができたら愉快でしょうね。

### おわりに

これは書籍紹介と言えるでしょうか。多分普通の書評でも書籍紹介でもないと思います。紹介に名を借りて私の経験や考えを勝手に書いたと言われそうです。けれどもパルバース先生のお考えも紹介していますし、自賛的にいえばその紹介もそう的外れでもないと思います。拙文を読んで先生のご本を読んでみようという人が一人でも多くであれば幸いです。

---

### (注記)

1) 拙稿「未来の大学像」『LEC 会計大学院紀要』第 11 号 2014. 3 p. 181 以下参照

### (参考文献)

・ロジャー・パルバース著、早川敦子訳『驚くべき日本語』集英社インターナショナル、2014 年。

・ロバート M. サボルスキー著、大沢章子訳『サルなりに思い出す事など』みすゞ書房、2014 年。  
・遠藤周作『私のイエス』祥伝社 1988 年。  
・『From a ruined empire, Letters - Japan, China, Korea 1945-46』edited by Otis Cary, Kodansha International, ltd 1984.